

# 尊王烈士の足跡

明治維新を前に、王政復古をめざした勤王志士は薩摩、長州、土佐、肥前各藩がその主役を担っていました。福岡藩でも「攘夷か、開国か」で世論は激動していました。その中で佐幕の藩政に抵抗し、学問を重ねて勤王に尽力した二人の武士がいます。筑紫神社（筑紫野市原田）の境内にある「尊王烈士碑」に残る二人です。旧西小田村の岡部謙と旧隈村の吉田重藏で、昭和3年、顕彰のため当時の筑紫村小学校用地に建立されました。

岡部謙は、1808年（文化5）同村庄屋平山茂次郎家に生まれ、字は士皆、通称甚助。後に夜須郡朝日村の大庄屋に預けられました。読書好きで農事の合間も書物を離さず、胸に「読書中不言」の小札をさげていたので狂人扱いされたほどでした。福岡に出て儒学と兵学を修め、藩の在郷家臣・岡部徳右衛門を嗣いで、さらに学問を深めました。そのころ隣村の吉田重藏と子弟関係となり、重藏が脱藩して上方に向かった時には伝家の刀を贈っています。42歳で病死しましたが、馬市の墓石には「樂天斎」の号が刻まれています。

吉田重藏は1831年（天保2）、郷士田中清助



▲筑紫神社境内の「尊王烈士碑」



▲筑紫神社の東側参道。右手に尊王烈士碑がある。

の次男に生まれ、はじめ重吉、生前の実名は良秀。幼くして文武に励み勤王派の平野国臣らと親交、1860年（文久元）郷里を出て諸国の勤王家とも通じました。その後、倒幕運動に参加するため妻子を残して、自ら除籍。母方の姓を名乗って上京しました。翌年、外国船による下関砲撃をきっかけとして討幕運動に発展、天誅組の大和挙兵となったの

です。天誅組は公家の中山忠光を盟主に、重藏は監察の要職で参加しましたが、総勢力は久留米、肥前、土佐など脱藩の志士を加えてもわずか30余人。代官所襲撃は成功したものの京都の政変で企ては失敗し、紀州勢に追われ奈良、十津川から熊野に転戦したのち、捕縛されました。その頃、平野国臣も兵庫・生野銀山で決起に失敗、いずれも京都の獄に捕われました。

重藏が大和から実兄に宛てた手紙が残っています。「皇朝日々宸襟御なやまし遊ばされ候折柄…君に事あれば君に忠するは天下の常なり、況や今日小子二男に候得ば賢兄、二親を育みあり候上は遺心なく君へ忠を尽くし、事有るの日は真っ先駆けて華々しく討死仕るべきにて御座あるべく候…」(一部略)「後のこ

とは、良藏氏、岡部氏に御尋問を」と指名しているのは、師である「樂天斎岡部謹」のことです。

挙兵の翌年、1864年(元治元)7月、二人の勤王志士は壮途空しく刑死しました。筑紫の地で維新の実現に成功した三条実美卿ら尊王攘夷派の公家たちが長州入りしたきっかけとなったのは、この重藏らの刑死だったといわれています。

享年34歳、吉田重藏の勤王と故郷への思いは次の辞世に極まっています。

「九重につくす心のまさりてそ いよいよ恋しきふる里の空」

1902年(明治35)、太政官から娘トキあてに「従五位」の叙勲が贈られています。

